

西郷隆盛の維新理念と明治六年政変

——「御一新の基」を手掛かりとして——

下田 悠真

はじめに

本稿は、西郷隆盛の政治観・死生観を明らかにし、明治六年政変へのつながりを考察するものである。西郷自身が「御一新」^①に何を求めていたのか、その理念・課題を説明することで政治上の画期である明治六年政変への影響を考えてみたい。

西郷個人に関する研究は多くあり、幕末維新政治史を論じる際には、必ず触れられる人物と言っても差し支えはないであろう。しかし、「御一新」という変革を主導した一人であるにも関わらず、その具体的な理念は不明確であり、先行研究でもほとんど扱われていない。「明治六年八月三日三条実美宛て西郷隆盛書簡」^③を用いて、朝鮮問題における西郷の真意は

王政復古の理念に基づいた「名分条理」を正すことであつたと指摘した吉野誠氏^④、西郷が「維新の精神（理念）」と絡めて対朝鮮強硬論を堅持したことを指摘した家近良樹氏と坂野潤治氏^⑤ぐらいであると考えられる。特に注目に値するのが吉野氏の論考であり、朝鮮外交における維新理念に関わる「名分条理」とは、朝鮮が天皇の威令に服すことであるとし、「名分条理」の貫徹が重要であり、朝鮮問題の解決は平和的であるか武力的であるかは問わなかったとする。維新理念や「名分条理」についての指摘は示唆に富むものがある。しかし、西郷自身が具体的にどのような理念を志向したのかという言及はない。後述するが、政府内における朝鮮問題への関心が薄い状況の中で、西郷はあえてこの問題に着手しようとした。当時の朝鮮問題は日本国家の課題というよりも、西郷個人の課題になっていた側面がある。よって、本稿では、この点に

注目しながら、幕末維新を通して西郷がどういうことに憤り、「御一新」という変革に何を求めたのかという、西郷の維新理念を検討していく。さらに、西郷が明治六年政変の過程において「死」に関して多く言及しているが、この西郷の「死」に対する意識についても論究していきたい。

西郷の「死」に対する意識と維新理念の関係性について説明を加えておく。西郷は自らも中心人物の一人となり、王政復古政変及び戊辰戦争によって「旧政府」である徳川氏を排除した新政府を創出した。その手段は藩の軍事力を使用したやり方であった。西郷らのやり方に賛同する勢力は少数であり、大方は反対か日和見の立場であった。西郷の維新理念の根幹は、まさにここにあると考えられる。つまり、自らが半ば強引なやり方で創出した新政府においてはつきりと責任を果たさなくてはならないと考えていたのである。明治二年から明治四年までの約二年間は鹿児島に戻って藩政を取り仕切るが、その後の明治六年政変で再び鹿児島に戻るまで西郷は重鎮として中央政府に在った。新政府を創出した西郷にとって「死」を意識しての政策実行は自らの責任を果たす意味があったと考えられる。

また、西郷の維新理念についての研究がこれからの幕末維新史研究にどのような意義があると考えられるのかを説明する。西郷隆盛の言動は過激性を含んでおり、朝鮮使節問題においての言動も同様である。西郷の過激性が「御一新」とい

う大変革を成し遂げた一つの原動力になったことは確かであろうが、その起伏の激しさに「捉え難い人物」というレッテルが張られ、西郷の維新理念を冷静に論理的に解明することが今までなかったのが、研究量の少なさ・関心の薄さの原因だったのではないかと考えられる。西郷の言葉には細心の注意を払う必要があるが、管見の限り過激な発言の数々はしっかりと整合性があるように考えている。西郷の維新理念の解明は、西郷にとつての「御一新」の大義や何のために政治闘争を生きたのかという理由を考えるうえで必要なことであり、この研究により過激な言動の意味も説明できると思われる。

第一章 「御一新の基」

明治六年八月三日三条実美宛て書簡にて、西郷は次のようなことを言っている。⁶⁾

近來副島氏帰朝相成、談判の次第細大御分り相成候由就ては台湾の一条も速に御処分相成度事柄と奉存候、世上にても紛紜の議論有之、私にも数人の論を受候次第に御座候処、畢竟名分条理を正し候儀は、討幕の根元、御一新の基に候へば、只今に至り、右等の筋を不被相正候ては、全ク物好の討幕に相当り可申抔との説を以テ責付参り候者

も有之候故、閉口の外無他仕合に御座候、いづれ共副島氏不罷歸候ては、御処分難相立との義を以、兎角会釈置候得共今日に至候ては、休暇の詔を以御決定不相成との言逃りは迎も出来不申幾度も世人の難論を受候義に御座候へば、甚困難の次第に御座候間、急速御処分被相度事に御座候、左候へば如何程責を蒙候共、一言の申詔不致候共、自ら安心の場有之候故、少しも困窮不致候得共、何も無之処を責掛られ候ては、独心に恥、辛苦の事に御座候、勿論使節帰朝後数日を経候共、為何御処分不相定候ては、実に御不体裁を極候間、速に御評決相成度義と奉存候、

一朝鮮の一条御一新涯より御手を被付、最早五六年も相立候はん、然処最初、親睦を求められ候義にては有之間敷、定て御方略為有之事と奉存候、今日彼が驕誇侮慢の時に至り、始を變じ、因循の論に涉り候ては、天下の嘲を蒙り、誰あつてか、国家を隆興する事を得んや、只今私共事を好み猥りに主張する論にて決ては無之是迄の行懸りにて如此場合に行当り候故、最初の御趣意不被為貫候ては、後世迄の汚辱に御座候間、斯に至り、一涯人事の限り被為尽候処に御座候間、断然使節被召立、彼の曲、分明に公普すべき時に御座候

この書簡で西郷は、台湾・朝鮮問題について三条に意見し

ている。その内容は、①副島外務卿が帰国したので台湾問題を処置したい、②台湾問題について、世間でも議論されているが、私（西郷）にも数人が「御一新の基」である「名分条理を正」すことを主張してきた、③副島が帰国した今、「世人の難論を受」けていることもあるので、速やかに処分を決定したい、④何も考えていなかったところに責めを受けて独り恥じている、⑤副島らの使節が帰国して数日経っていて台湾問題について何も決まらないというのは体裁が悪いから速やかに決めてほしい、⑥朝鮮問題は御一新の頃から着手して早くも五、六年が経つ、⑦朝鮮へ親睦を求めたわけではなく、「御方略」を定めたはずであると思う、⑧朝鮮が「驕誇侮慢」になり、「始」を變じ、日本側が決断できないようなことになれば、天下の嘲りを蒙り、誰が日本国家を興隆できるであろうか、⑨私（西郷）たちは好き好んでこのようなことを言っているのではなく、こうした状況になったから言っているのであり、「最初の御趣意」が貫かれなくては後世までの汚辱である、⑩人事の限りを尽くして、きっぱりと私（西郷）を使節にして、朝鮮の「曲」（ねじまがっている様）を明らかにするべきである、というものである。

さらに注目してほしいのが、傍線部の「御一新の基」¹⁰という語である。外務卿副島種臣が帰国したため、台湾問題について処置したい旨を記し、加えて世上でもこの問題について議論がなされているという。西郷のところへも、台湾問題に

ついで「名分条理を正」すことは、「討幕の根元」「御一新の基」であり、それが成されなくては、「物好の討幕」にあたる談判に及ぶ者がいて、西郷は閉口したという。台湾問題の「御処分」が決まらなくては、「御一新の基」である「名分条理を正」す政治は確実に行われているのだと訪問者に対して反論できずに困っている西郷が浮かび上がる。ここに、西郷が外交問題に着手しようとした動機が秘められているのではないだろうか。つまり、台湾問題や朝鮮問題といった外交問題を「御一新の基」に則り、解決しなくてはならないと喚起されたのではないだろうか。

では、「御一新の基」とは何か。その内容は如何なるものであったのか。外交問題に着手したのは、西郷の中で「御一新の基」について喚起されたことが要因と見られる以上、この問いは避けては通れない本論の基礎である。西郷が直接的に「御一新の基とは何か」という答えを出している訳ではないが、若干の考察を試みたい。

『西郷南洲遺訓』には、次のような言葉が記録されている。^①

談国事に及びし時、慨然として申されけるは、国の凌辱せらるゝに当りては、縦令国を以て斃るゝ共、正道を踏み、義を尽すは政府の本務也。然るに平日金穀理財の事を議するを聞けば、如何なる英雄豪傑かと見ゆれ共、血の出る事に臨めば、頭を一処に集め、唯目前の苟安を謀るのみ、

戦の一字を恐れ、政府の本務を墜しなば、商法支配所と申すものにて更に政府には非ざる也

西郷は、国が辱めを受けたならば、たとえ国が倒れようと正道を踏んで義を尽くすのが政府の役目であるということを書いてある。また、「戦の一字を恐れ」て、政府の役割を果たさないことを戒めている。「正道を踏んで義を尽くす」「戦の一字を恐れない」という二点は、西郷が新政府に要求した政治姿勢であり、「御一新」という変革に望んだことである。前政権である幕府との比較で言えば、明治六年八月十七日付きの板垣退助宛て書簡^②にて、「旧政府（幕府）」は「機会を失し、無事を計て、終に天下を失」ったとしている。変革の機会を失い、外交を穩便に済ませようとしては、政権が瓦解すると西郷は見ていた。要するに、「討幕の根元」「御一新の基」「名分条理を正」すということの意味は、外交に関して単に穩便に済ませようとするのではなく、正道を踏んで義を尽くし、筋が通らないことがあれば戦争も恐れない姿勢で立ち向かうということである。それが西郷へ直訴した「数人の論」であり、西郷が改めて自覚したことではないだろうか。西郷が外交問題に自ら乗り出したのは、「御一新の基」を貫徹させるためであったと考えられる。こうした西郷の考えが、自らの生命を顧みずに、言わば捨て身同然で外交問題の解決策を図ろうという行動に転化していったと考えられる。

町田明広氏は、西郷が幕末期において二度目の召還をされた直後に、島津久光に誠意を示すためなのか長州問題を解決するために自ら長州藩領に入ろうと決意していたことを紹介している。こういった政治行動は、五卿移転のために下関に乗り込んだこと、さらには征韓論を唱えた際にも貫かれていたとし、このスタイルは必ずしも死ぬことを前提としたものではないと分析している。¹³しかし、「御一新の基」に則つてみると、捨て身同然で大胆に政治行動を行おうとする姿が見えてくる。西郷は大義名分にこだわりを持ちつつ、自らの生命を顧みない大胆な行動で問題の解決を図る政治スタイルと言える。つまり、最悪の場合において、西郷は死んでも構わないと考えていたと思われる。この西郷の「死」に対する意識は、第四章でさらに詳述していく。

西郷の政治姿勢は、国家単位で行動するというよりは、個人単位でも行動する点に特徴がある。具体的な例としては、文久二年の薩摩藩・島津久光の率兵上京の際に、西郷は先発して下関で待つように命令があったが、その後西郷は独断で下関を退去し、上方で政治行動をとった。西郷は政局の打開を目指す際には、個人で行動することが多々ある。その点を考慮すれば、政府全体の意思よりも西郷自らが重要課題と定めた朝鮮問題に個人で力を入れようとする事態は想定でき

第二章 維新理念の醸成

旧政府（幕府）と新政府を比較した際に、西郷は「旧政府（幕府）」においては外交に関して「機会を失し、無事を計て、終に天下を失」つたとみていた。それでは、幕末からさかのぼって西郷は「幕府」などに対して如何なる批判を行っていたのかを見ていくことにしたい。

「御一新」という変革の中で、「徳川公儀」がいつしか「幕府」と呼称されて批判の対象となり、徳川氏が政権返上（大政奉還）を行うものの、最終的には武力衝突（戊辰戦争）によって壊滅したという一連の流れは周知の通りである。薩摩藩及び西郷も「幕府」及び「一会桑」¹⁴に対して批判を加えている。例えば、慶応二年一月の京都において小松帯刀と共に長州藩の木戸孝允と交わした「薩長盟約」が代表的であろう。この盟約では、幕長戦争が発生した際の薩摩藩側の対処方法が記されている。その中でも、「橋会桑等も如只今次第に而勿体なくも朝廷を擁し奉り正義を抗み周旋尽力之道を相遮り候ときは終に及決戦候外無之との事」と、橋（一）会桑が薩摩藩の周旋尽力を阻害するときは、決戦に及ぶとしている。¹⁵また、幕府に対しても薩摩藩は長州再征に断固反対し、幕府の出兵命令を拒否している。

幕長戦後、四侯会議の失敗・薩土盟約締結を経て、西郷は慶応三年八月に注目すべき発言を行う。慶応三年八月十四日、

京都において小松帯刀・大久保一蔵（利通）と共に長州藩士
柏村数馬・御堀耕助と会談した際のことである。このとき、
西郷は薩摩藩側の挙兵計画における戦略を長州藩側に伝える
と共に、「於弊藩討幕ハ不仕」と表明して挙兵の成り行き次第
で同志の堂上から「討將軍之綸旨」を発する計画であるとい
う。¹⁷

慶応三年十月八日、中山忠能・正親町三条実愛・中御門経
之に宛てて小松帯刀・西郷吉之助（隆盛）・大久保一蔵が「願
書及び討幕趣意書」と称される趣意書を提出した。幕府・將
軍に対する批判が明確に記されており、西郷自身の維新理念
にも大きな影響を与えたと考えられる。この趣意書は幕末の
政治過程を見事に描写しており、西郷は小松・大久保と共に
条約を「違勅調印」したことや長州問題、兵庫開港問題、公
議公論を阻害したことなどから幕府・將軍（大樹公）を内政・
外政の両面から批判している。¹⁸ 將軍が公議公論を阻害してい
るといふ点から、慶応三年八月十四日の「討將軍之綸旨」発
言がなされたと言える。いずれにしても、幕府・將軍への明
確な批判と「皇国」に対して座視し難い気持ちが述べられて
いる。西郷は、これらの旧体制が「機会を失し、無事を計」つ
た故に批判しているのである。

この五日後に將軍徳川慶喜は大政奉還を表明し、その裏で
は薩長に「討幕の密勅」が下っている。「討幕の密勅」といっ
ても、徳川慶喜・松平容保・松平定敬をターゲットとしたも

のであり、それまで「一会桑」を対決対象としていた西郷ら
の意向を反映している。

以上を踏まえて、「幕府」「一会桑」「將軍」などという旧体
制への批判が西郷にとっての「御一新の基」という維新理念
をつくりだしたと考えられる。

第三章 朝鮮問題

第一章で論じたように、西郷が朝鮮問題にこだわりを持っ
たのは、「御一新の基」という維新理念の貫徹が目的であった。

明治初期の朝鮮問題とは、明治元年十二月に日本側が新政
府樹立を朝鮮側に通告したものの、朝鮮側は文書の受け取り
を拒否し、それ以来、国交の停滞が続いた問題である。¹⁹ この
朝鮮問題に対して、明治六年（一八七三年）に西郷隆盛は自
ら朝鮮使節の任にあたりたいと表明して一旦は閣議で内定さ
れたものの、²⁰ 外遊から帰国した岩倉具視・大久保利通らの反
対から閣議は紛糾し、最終的には覆された。西郷隆盛は抗議
の意思から辞職し、西郷の朝鮮派遣を支持していた板垣退助・
後藤象二郎・副島種臣・江藤新平もこれに続いた。この一連
の政治事件を明治六年政変という。²¹

明治六年政変における対立構造は時代によってあらゆる説
明がなされてきた。²² それに対して新解釈を提示して画期をな
したのが、毛利敏彦氏の一連の研究であり、²³ 政変の中心人物

である西郷隆盛には征韓の意思が希薄であり、むしろ日朝両国間の修好実現を目指して朝鮮使節を志望したはずであるとした。これに対して、田村貞雄氏は、西郷は征韓論を唱え、朝鮮使節が不調に終わった段階で派兵を敢行するつもりであったと徹底的な批判を行なった。²⁴この毛利・田村論争を踏まえて、多くの実証的な研究成果が出された。²⁵ただし、どの論考も指摘するように西郷隆盛の「真意」について未だに定説はないと言える。

明治六年に朝鮮問題が政府内で大きく取り上げられることになったが、例えば、岩倉具視は、「朝鮮征伐御互に兼而承知之通真に御評議有之候得共是以即時之事にては無之哉と存候」とこの問題に関して緊急性を見出していなかった。²⁶つまり、西郷が朝鮮問題を持ち出さなければこの問題は先延ばしにされていた可能性が高かったとみられる。

それでは、幕末から行動を共にし、「討幕趣意書」を提出するなど維新理念を共有したはずの盟友・大久保利通が朝鮮使節派遣に反対した理由は何なのか。そして、対外強硬論を主張する板垣退助（朝鮮出兵）や桐野利秋（台湾出兵）の他に、黒田清隆も樺太出兵を主張しつつも、²⁷西郷が朝鮮に派遣されることに反対し、結果的に派遣阻止のために動くことになってしまったのはどうしてなのか。

佐々木克氏は、朝鮮問題で揺れていた明治六年十月十五日から十九日までの大久保利通の日記から黒田清隆・西郷従道

が大久保と頻繁に会合を重ね、実際に大久保が黒田に対して西郷の朝鮮派遣を阻止するための「一ノ秘策」を伝えていることに注目している。²⁸黒田は「一ノ秘策」に賛同して実際に行動している。その理由は推察だが、西郷が朝鮮へ派遣されて死んでしまうことを危惧したからだろうという。第一章で論じたように、西郷は「御一新の基」に則って捨て身の姿勢を貫こうと考えていたため、西郷の「死」に関しては佐々木氏の推論は肯定できる。しかし、大久保や黒田が朝鮮問題において西郷の「死」をためらっていたというのは史料の根拠が薄いため、検討していかなければならない問題であろう。

第四章 「死」に対する意識

それでは、第一章、第三章に続いて具体的な西郷の「死」に対する意識についてみていく。

西郷が朝鮮使節の任にあたるうえで「死」を覚悟していたとする証言は多い。例えば、高島鞆之助の証言である。²⁹

大久保公と大西郷との仲がそんなであるのに、征韓論の時に何故破裂したというのか。それはああいう偉い方々になると、自分の議論はやがて天下の議論で、そう軽々しく動いたり変えたりすることはできぬ。しかし、西郷翁は遠見達識のお方じゃ。大久保公や木戸（孝允）公の

考えたことぐらいいは、無論考えていたじゃろう。大久保公も西郷翁の心の中はよく分かっていたらうが、それでいてなぜ西郷翁に反対したかというに、それは西郷翁はあの時には全く死ぬつもりでいた。朝鮮は実に無礼なことをしおる。これを懲らさいでは国の恥辱である。しかし、ことを起こすには大義名分が必要である。しかし、

この大義名分はオイソレとは作れない。そこで西郷翁は自分で出かけて行けば、きつと朝鮮人をおいを殺すに違いない、おいがやられたら後は事を起こすに大義名分が立つ、これが西郷翁の心事じゃった。こんなことは翁は木戸公や大久保公には話さなかったらうが、始終お傍にいた桐野（利秋）なんかには話されたもので「おいが死んだらやれ」と言っておられた。こういうことが分かってみれば、西郷は決して出してはやれない。木戸公の心事は知らぬが、大久保公の心持ちはおいにはよう分かる。

また、牧野伸顕も同じように当時の様子を伝える証言を残している。³⁰⁾

征韓論の時は西郷さんは全く死ぬつもりであったのです。朝鮮へ行っておれは死ぬ、そうすれば後で堂々の軍が起これるといのが西郷さんの心事であった。西郷は死ぬことぐらいいは何とも思っていなかったに違いない。しか

し、一方では、西郷は死ぬつもりでおるが、西郷を死なしては国内の鎮撫においても困るし、国力という点でも差し響くから、これは西郷はやれないというのが原因であった。父などの心事も明らかに察せられます。

これらの証言から見えてくることは、西郷は死ぬつもりで朝鮮へ行こうとしていると周囲から見られていたということ。また、西郷自身もどうやら側近の桐野利秋らに万が一殺されたら後を託す旨を話していたことである。そして、牧野証言から大久保自身が西郷の「死」を憂いていた様子が推測される。³¹⁾ 第三章における佐々木克氏の推論は牧野証言を踏まえれば肯定できるように思われる。勿論、西郷の「死」のみを憂いていたわけではなく、政策論の相違と戦争に至るかもしれないという危惧があったからでもある。³²⁾

証言から西郷は死ぬつもりであると周囲が思っていたことを見てきた。次に、これまでの先行研究でも詳細な検討がなされているが、改めて明治六年当時の西郷書簡を再検討してみることで西郷自身の「死」に対する意識を重点的に読み解いてみたい。

明治六年七月二十九日付きの板垣退助宛て書簡は、西郷が朝鮮使節派遣に際して、その手順について言及した史料である。³³⁾

弥御評決相成候はゞ、兵隊を先に御遣し相成候儀は、如何に御座候哉。兵隊を御繰込相成候はゞ必彼方よりは引

揚候様申立候には相違無之、其節は此方より不引取旨答候はゞ、此より兵端を開き候はん、左候はゞ初よりの御

趣意とは大に相変じ、戦を醸成候場に相当り可申哉と愚考仕候間、断然使節を先に被差立候方御宜敷は有之間敷

哉、左候得ば決て彼より暴挙の事は差見得候に付、可討の名も慥に相立候事と奉存候、兵隊を先に繰込候訳に相

成候はゞ、樺太の如きは、最早魯より兵隊を以保護を備、度々暴挙も有之候事故、朝鮮よりは先に保護の兵を御繰

込可相成と相考申候間旁住先の処故障出来候はん、夫よりは公然と使節を被差向候はゞ暴殺は可致儀と被相察候

付何卒私を御遣被下候処、伏して奉願候、副島君の如き立派の使節は出来不申候得共、死する位の事は相調可申

かと奉存候間、宜敷奉希候

この書簡では、板垣退助らの即時出兵論に疑問を呈している。理由は、こちらから兵端を開いてしまいかねず、「初よりの御趣意とは大に相変じ」るからである³⁴。そこで、まずは使節を派遣し、朝鮮側が暴挙を行ってきたら「可討の名」が立つとする。その暴挙の内容は、西郷の見立てだと「暴殺は可致儀」であるという。そして、最後に「死する位の事は相調可申か」と決意表明する内容である。この書簡を見る限り、

西郷は自らが殺されることで大義名分が立つように仕向けようとしている。

次は、明治六年八月十四日付きの板垣退助宛て書簡を見てみよう³⁵。

(前略) 朝鮮使節の儀、何卒此上の処、偏に御尽力被成

下度奉祈候(中略) 就ては小弟被差出候儀先生の処にて御猶予被成下候ては、又々遷延可仕候付、何卒振切て御

遣被下候処御口出し被成下度、是非此処を以て戦に持込不申候ては、迎も出来候丈けに無御座候付此温順の論を以て

はめ込候へば、必可申候付、只此一挙に先立、死なせ候ては不便扨と、若哉姑息の心を御起し被下候ては、何

も相叶不申候間、只前後の差別あるのみに御座候間、是迄の御厚情を以、御尽力被成下候へば、死後迄の御厚意

難有事に御座候間、偏奉願候、最早八分通は参掛居候付、

今少の処に御座候故、何卒奉希候

「朝鮮使節の儀、何卒此上の処、偏に御尽力被成下度奉祈候」と、自ら(西郷)が朝鮮使節に任命されるように板垣の尽力を頼んでいる。そして、使節派遣をして「戦に持込」もうとする。使節派遣に先立ち、自分(西郷)を死なせるのは不便などと思つては何もできないとも言う。板垣が尽力してくれば、死んだ後まで御厚意を有り難く思っているという。

次は、明治六年八月十七日付きの板垣退助宛て書簡を見てみよう。⁽³⁶⁾

(前略) 此節は戦を直様相始め候訳にては決て無之、戦は二段に相成居申候、只今の行掛りにても、公法上より押詰候へば、可討の道理は可有之事に候へ共、是は全言訳の有之迄にて、天下の人は更に存知無之候へば、今日に至り候ては、全戦の意を不持候て、隣交を薄する儀を責、且是迄の不遜を相正し、往先隣交を厚する厚意を被示候賦を以、使節被差向候へば、必彼が軽蔑の振舞相顕候のみならず、使節を暴殺に及候儀は、決て相違無之事候間、其節は天下の人、皆拳て可討の罪を知り可申候間、(後略)

この書簡では、これまでの先行研究でも指摘されているように具体的な手順を示している。「戦を直様相始め候訳にては決て無之」としながらも、戦いは「二段」であり、「公法(万国公法)」によっても「可討の道理」は立つが、「天下の人」は知らないことなので、まずは隣交を厚くするための使節を派遣すべきであるとする。そして、朝鮮側が使節を「暴殺」に及んだところで、「天下の人」は事の次第がわかるとする。ここでは、使節が「暴殺」されることを具体的な説明をしながら論じている。

次は、明治六年八月二十三日付きの板垣退助宛て書簡を見

てみよう。⁽³⁷⁾

(前略) 御教示の趣、深奉感佩候、死を見る事は帰する如く、決ておしみ不申候得共、過激に出て、死を急ぎ候儀は不致候間、此儀は御安堵被成下度奉希候、乍然無理に死を促候との説は、跡以^テ必ず起り可申畢竟其辺を以^テ戦を逃候策を廻し候儀、必定の事と奉存候付、先生は御動き被下間敷、今日より御願申上置候、扱小弟此節の病気に付、主上より御沙汰を以、医師え被命治養仕候間、医師の命ずる通りいたし来候処、最早治養所にては無之候得共、難有御沙汰を以加養いたし候付ては、死する前日迄は治養決て不怠と申居候位に御座候間死を六ヶ敷思ふものは狂死でなくては出来不申候、皆々左様のものかと相考可申候得共、夫等の儀は兼て落着いたし居候間、申上候も余計の事とは奉存候得共、先生の御厚志忘却難致、御安心迄に卒度申上置候

この書簡は、西郷が朝鮮使節として派遣されることが決定した直後のものである。それまで自ら「暴殺」されることで大義名分が立ち、「天下の人」は事の次第がわかるとして積極的に自らの「死」を活用しようと捨て身の覚悟を示していたが、板垣に諭されたのか、論調が一転して死に急がないことを記す。手順としてはそれまでと同様の方法を目論んでおり、「死」

を顧みない姿勢であることに変わりはない。また、自らの持病の治療を死ぬ前日まで怠らないとしており、日本国家の興隆のために自らの「死」を捧げようとしている姿も垣間見える。そして、西郷の「死」に対する意識として、「死を六ヶ敷思ふものは狂死でなくては出来不申候」という言葉が続く。つまりは、死にきれない者は「狂死」というかたちでないと死ぬことができないと思っていた。だが、それも落ち着いたという。

西郷が板垣に書簡で語ったことをまとめると、隣交を厚くする名目で使節を派遣し、「暴殺」されることで大義名分が立ち、「天下の人」も事の次第がわかり、戦争に持込めるという。では、どうして西郷は自らの「死」と引き換えに大義名分を立てようとしなければならなかったのであろうか。

前述した通り、「御一新の基」とは、外交に関しては単に穩便に済ませようとするのではなく、正道を踏んで義を尽くし、筋が通らないことがあれば戦争も恐れない姿勢で立ち向かうということである。この觀念に則れば、朝鮮問題については、隣交を厚くする姿勢を示して（正道を踏んで義を尽くして）そのうえで使節が「暴殺」されるという筋が通らないことが発生した時点で戦争に持込むという論理が出来上がる。これが「御一新の基」という觀念から西郷が想定した朝鮮問題の解決法（＝国内政治の安定化）ではないか。西郷は何よりも大義名分を大切にし、そのためには自らが死んでも構わないと考えていたからこそ、このような大胆な論理で解決を図っ

たと考えられるのである。明治六年政変は、国家方針の分裂を巻き起こしたが、その発端は西郷隆盛という明治政府の重鎮の政治観・死生観が大いに影響していたということが指摘できる。

おわりに

本稿で解明した西郷隆盛の維新理念（政治観・死生観）とは、①「名分条理」が正されていなかった「幕府」「一会桑」の失政を批判して「御一新」をやり遂げたため、自ら責任ある政治を課したこと。②「名分条理」を正すということは、「御一新の基」であり、それを外交問題に当てはめてみると、国家間のことに關して単に穩便に済ませようとするのではなく、筋が通らなければ戦争も恐れない姿勢で解決を図ること。さらに、西郷自身の政治姿勢については、「死」をも恐れない大胆な行動姿勢が特徴的である。それは時に行き過ぎた個人活動になって表れ、朝鮮問題はその典型である。

西郷は、「幕府」「一会桑」の失政を批判し、そのうえで「御一新」という変革において新政府に対して「正道を踏んで義を尽くす姿勢を求めた。例えばその内容は、「名分条理を正す」ということ、つまり、日本政府の正当な主張が通らなければ、戦も恐れない姿勢を貫くことである。朝鮮問題における西郷は、自身が直接朝鮮へ赴くことでこの姿勢を貫こうとしたが、

大久保利通や黒田清隆などは西郷が決死の覚悟で朝鮮へ赴くことに危惧を覚えて反対し、その阻止工作によって西郷自身は本懐を遂げられなかった。

何故、維新理念を共有したはずの西郷と大久保は袂を分つことになったのか。それは、あくまで維新理念にこだわる西郷に対して、外遊などを経て国際関係の複雑さを理解し、内治優先を唱えると共に、西郷を失いたくない大久保の姿が浮かび上がってくる。第四章の牧野証言から推測できることは、大久保の「内治優先」には西郷隆盛という存在が不可欠であったということである。また、個人的情誼に拘わらず、朝鮮問題における西郷の政治行動は、国家を巻き込む事件・戦争に発展しかねない要素を多分に含んでいたこともあり、「内治優先」を唱える大久保が待ったをかけたのは当然である。明治六年政変は、西郷隆盛の維新理念と大久保利通の国家構想が衝突したことで起こった分裂であったと言える。

総括すると、明治六年政変は「征韓論政変」と称されるように「征韓」をめぐる政治的対立であった側面は勿論あり、西郷隆盛も維新理念の実現のために朝鮮使節を志願し、「征韓」をも手段にしようとした。ただし、単純に对朝外交の解決のために「征韓論」を提起した訳ではなく、国内政治の安定化のための「朝鮮使節志願」と「征韓論」であった。これらから言えば、明治六年政変は西郷隆盛が幕末から培ってきた政治観・死生観が朝鮮問題を題材として展開されたことで

起きた政変であり、「征韓論」が必ずしも主題であるわけではない。³⁸西郷隆盛が突きつけた国家・政府の在り方をめぐるといって明治六年政変の本質だと考えられる。

註

(1) 本稿では〈維新〉〈明治維新〉〈御一新〉などの同義語を「御一新」と総称する。

(2) 西郷隆盛についての研究は、例えば、圭室諦城『西郷隆盛』（岩波書店、一九六〇年）、井上清『西郷隆盛（上）』（中央公論社、一九七〇年）、『西郷隆盛（下）』（中央公論社、一九七〇年）、田中惣五郎『西郷隆盛』（吉川弘文館、一九八五年）、五代夏夫編『西郷隆盛のすべて』（新人物往来社、一九八五年）、猪飼隆明『西郷隆盛―西南戦争への道―』（岩波書店、一九九二年）、落合弘樹『西郷隆盛と土族』（吉川弘文館、二〇〇五年）、『西南戦争と西郷隆盛』（吉川弘文館、二〇一三年）、家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局―体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変―』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）、坂野潤治『西郷隆盛と明治維新』（講談社、二〇一三年）などがある。

(3) 「明治六年八月三日三条実美宛て西郷隆盛書簡」（大川信義編『大西郷全集』第二巻、平凡社、一九二七年、七四二〜七四八頁）。本論を考察する上で重要な史料である。詳細は後述する。

- (4) 吉野誠「明治六年の征韓論争」(『東海大学紀要文学部』七十三号、二〇〇〇年)。
- (5) 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局—体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変—』前掲註(2)、坂野潤治『近代日本の外交と政治』(研分出版、一九八五年)。
- (6) 高橋裕文「武力倒幕方針をめぐる薩摩藩内反対派の動向」(家近良樹編『もうひとつの明治維新—幕末史の再検討—』有志舎、二〇〇六年)。
- (7) 前掲註(3)。
- (8) 「始」や「最初の御趣意」というのは、日本政府の対朝外交方針のことであり、日本の「王政復古」を朝鮮側に認めさせることである。
- (9) 前掲註(8)。
- (10) 「討幕の根元」と「御一新の基」について、西郷はこの二つの言葉を同義とみているため、本稿では主に「御一新の基」という言葉を用いることにする。
- (11) 山田済斎『西郷南洲遺訓』(岩波書店、一九三九年)十一頁。ちなみに、福地惇氏は西郷の発言が正確に書かれているか否かについて、西郷やその周辺者の心理的雰囲気(『西郷南洲遺訓』)に生き生きと記録されていることが重要であるとみている(福地惇「明治政府と西郷隆盛—西郷上京問題を中心に—」、『日本歴史』第四九〇号、一九八九年三月、六二頁)。
- (12) 「明治六年八月十七日板垣退助宛て西郷隆盛書簡」(前掲『大西郷全集』第二巻、七五四〜七五六頁)。この書簡についての詳細は後述する。
- (13) 町田明広「元治元年前半の薩摩藩の諸問題…小松帯刀の動向を中心に」(『神田外語大学日本研究所紀要』七巻、二〇一五年六月、三七頁)。
- (14) 青山忠正氏の指摘では、「幕府」とは將軍家の特に老中・若年寄以下の幕僚を指しているとし、將軍家が「公儀」と認められなくなっていた結果であるという(青山忠正『明治維新と国家形成』吉川弘文館、二〇〇〇年、四〜五頁)。
- (15) 「一会桑」とは、一橋慶喜(禁裏御守衛総督・摂海防禦指揮)・会津藩(京都守護職)・桑名藩(京都所司代)の畿内勢力のことである。一会桑勢力についての代表的な先行研究は、家近良樹『幕末政治と倒幕運動』(吉川弘文館、一九九五年)、『江戸幕府崩壊 孝明天皇と「一会桑」』(講談社、二〇一四年)などがある。
- (16) 「慶応二年一月二十三日坂本龍馬宛て木戸孝允書簡」(日本史籍協会編『木戸孝允文書』二、東京大学出版会、一九八五年覆刻、一三八〜一三九頁)。
- (17) 「柏村日記 慶応三年八月十四日の条」(『山口県史 史料編 幕末維新4』二〇一〇年、二二二〜二二二頁)。筆者は、慶応三年における西郷らが変革を阻害しているのを見ていたのは「幕府」ではなく、將軍徳川慶喜その人であるという認識のもとで、「討將軍之論巨」発言はなされたものであると考えている。この点に関しては、拙稿「文久期から慶応期における広沢真臣の政治動向と思想」(『平成30年度明治150年記念後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究

支援事業』、二〇一九年）、同「木戸孝允は「討幕」を唱えたのか」（『山口県地方史研究』第一二二号、二〇一九年）を参照されたい。

(18) 「慶応三年十月八日中山忠能・正親町三条実愛・中御門経之宛て願書及び討幕趣意書」（前掲『大西郷全集』第二巻、四三〜五〇頁）。

(19) 朝鮮側が通告文書の受け取りを拒否したのは日本側が文書に「皇」
「勅」の字句を使用しており、旧例に反していたからであった。そ

こで対馬宗氏が行っていた朝鮮事務交渉を日本政府は接收し、朝鮮の国情を視察する目的で佐田白茅・森山茂らが派遣された。帰国した佐田らは、三十大隊の出兵を行えば朝鮮征服が可能であると建議を行なった。一方で、政府内では日清対等条約の締結を実現させることで、清国の外臣としての立場をとる朝鮮に国書を受理させようという主張が起ころ。しかし、日清修好条規が締結されたものの、朝鮮側は草梁倭館への食糧供給を拒絶し、日本を無法の国とする書札が掲示されるなど、依然として日本側を受け付けない態度をとっていた。日朝関係は「御一新」当初からつまづいていた。

(20) 諸洪「明治六年の征韓論争と西郷隆盛―閣議決定と「勅旨」をめぐる―」（『日本歴史』六五五号、二〇〇二年）では、西郷隆盛の朝鮮派遣を決めた閣議決定と実際に行われた天皇への上奏及び「勅旨」が矛盾している点を指摘しており、それまでの研究で西郷の朝鮮派遣は「内定」されていたとする見解に異を唱えている。

(21) 明治六年政変は征韓論政変とも呼ばれている。これは、政変の過程で争われた主題が征韓論であるという前提に立つ呼称である。西郷隆盛が征韓を意図していたのはどうしてなのかという問題は、

朝鮮使節に志願した動機を説明すれば明らかになるはずである。

(22) 明治六年政変における対立構造の説明は時代によって変化し、多様な解釈が試みられてきた。毛利・田村論争以前の明治六年政変の先行研究については、毛利敏彦『明治六年政変の研究』第二章「明治六年政変論の検討」（有斐閣、一九七八年）に詳しいので参照されたい。

(23) 毛利敏彦『明治六年政変の研究』（有斐閣、一九七八年）、『明治六年政変』（中央公論新社、一九七九年）など。

(24) 田村貞雄「西郷隆盛は「征韓」を企てなかったのか―西郷隆盛「遣韓使節決定始末」と板垣退助宛書簡―」（明治維新史学会『明治維新の政治と権力』吉川弘文館、一九九二年）、「征韓論」政変の史料批判―毛利敏彦説批判―」（田村貞雄編『幕末維新論集8 形成期の明治国家』吉川弘文館、二〇〇一年）など。

(25) 明治六年政変について、例えば、高橋秀直「征韓論政変の政治過程」（『史林』第七十六巻第五号、一九九三年）、前掲註(20)「明治六年の征韓論争と西郷隆盛―閣議決定と「勅旨」をめぐる―」、佐々木克「明治六年政変と大久保利通」（『奈良史学』第二十八号、二〇一一年）、家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局―体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変―』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）、勝田政治「征韓論政変と大久保政権」（明治維新史学会「講座明治維新4 近代国家の形成」有志舎、二〇一二年）などは、毛利・田村論争を踏まえて、政変に至るまでの過程や背景を実証的に解き明かしている。

- (26) 「明治六年九月十九日鮫島尚信宛て岩倉具視書簡」(日本史籍協会編『岩倉具視関係文書』五、東京大学出版会、一九八三年、三二〇～三二四頁)。
- (27) 註(2) 『西郷隆盛と明治維新』一六四～一七〇頁。
- (28) 前掲註(25) 「明治六年政変と大久保利通」。
- (29) 「西郷・大久保両雄の心事(高島鞆之助談)」(佐々木克監修『大久保利通』、講談社、二〇〇四年、一九〇～一九二頁)。
- (30) 「大西郷との交情(牧野伸顕談)」(前掲『大久保利通』三十五～三十六頁)。
- (31) この他にも、大久保が西郷の「死」を憂いていたことを示す牧野伸顕証言があるので紹介する。牧野は父である大久保の心情を推察しているかたちだが、核心をついていると言えるだろう。
- 何分にも薩摩はその頃に五万からの士族がおって、最多数と言われた加賀の百万石でさえ二万幾らであるのに、薩摩は七十五万石でも五万以上の士族があった。それが皆武と士氣とを練りに練っている、これが実に過激な連中で、西郷でなければ鎮撫は難しい。その他の藩の士族も不穩であったが、西郷さえおれば鎮撫ができる、この大事の西郷は死なされぬというのが、友人としての情と混じって、父の反対した訳でしょう。
- (32) 勝田政治『大久保利通と東アジア—国家構想と外交戦略』「征韓論争と東アジア」(吉川弘文館、二〇一六年)。
- (33) 「明治六年七月二十九日板垣退助宛て西郷隆盛書簡」(前掲『大西郷全集』第二巻、七三六～七三八頁)。
- (34) 前掲註(8) 参照。
- (35) 「明治六年八月十四日板垣退助宛て西郷隆盛書簡」(前掲『大西郷全集』第二巻、七五一～七五二頁)。
- (36) 前掲註(12)。
- (37) 「明治六年八月二十三日板垣退助宛て西郷隆盛書簡」(前掲『大西郷全集』第二巻、七六〇～七六一頁)。
- (38) 西郷隆盛を「征韓論者」として強調することは、あくまでも一要素を突いているに過ぎない。毛利敏彦氏・田村貞雄氏によって西郷は「平和論者」か「征韓論者」かという論争が行われたが、本稿による維新理念の解明によって西郷が「平和論者」であるという毛利説の捉え方は妥当ではなく、筋が通らないことがあれば戦争を辞さない姿勢を西郷は有していたと捉えられる。ただし、西郷は「征韓論」を有していたものの、通説の通りに「征韓論者」を強調し過ぎてしまうと明治六年政変が「征韓論」をめぐる政変としか認識されないだろう。明治六年政変は、朝鮮問題を題材とした国家の在り方をめぐる対立であった。